海　外　研　修　報　告

知的障害福祉分野における外国人労働者の受け入れについて

社会福祉法人　萌友会

就労継続支援事業Ｂ型事業所コリアンダーの家

管理者

馬　場　　隆　幸

〒851-0135　長崎県長崎市現川町１１１０－１

ＴＥＬ　：　（０９５）８１３－８７１３

ＦＡＸ　：　（０９５）８１３－８７１３

Ｅ－ｍａｉｌ：coriander@open21.to

目　次

Ⅰ．はじめに

Ⅱ．日本とデンマークにおける自閉症者に対する理解の違い

Ⅲ．デンマーク人が日本人の知的障害者を支援する際の問題

Ⅳ．日本人がデンマーク人の知的障害者を支援する際の問題

Ⅴ．知的障害福祉分野への外国人労働者受け入れの可能性について

Ⅵ．おわりに

Ⅰ．　はじめに

２００５年５月に、全国社会福祉協議会社会就労センターの海外研修でドイツ、デンマーク、フランスの３カ国を訪問した際、知的障害者のグループホームや自閉症者のケアホームを見学し、我が国における障害福祉に必要なことを３つ学んだ。１つ目は、自閉症を知的障害と完全に分けてとらえて支援すること、２つ目は、大きな施設ではなく１０人未満の小さな単位で支援すること、３つ目は外国人労働者の優秀な人材を活用することだ。

３つ目のテーマは、障害福祉分野ではどの国でもまだ一般的なことでは

ないが、すでに取り組む意識はあり、各国とも少しずつ取り入れている状況だ。ここ数年、わが国でも少子高齢化が懸念され、出生率の低下に歯止めがかからず、将来の障害者を支えるべき若者の絶対数が不足することが推測されると共に、障害福祉予算の少なさから、福祉の担い手の質の低下をどう防ぐかが課題となっている。私は、１つの仮説として、２０年後の日本の福祉は、優秀な日本人の若者がリーダーとして活躍し、若い、これまた優秀な外国人労働者が安い労働力として福祉の担い手の役割を果たすことにより、成り立つのではないかと思う。

そこで、今回、重度自閉症者である私自身の娘を連れて、デンマークの社会や障害福祉の実際を経験し、日本における障害福祉労働市場の開放に必要なことを学びたいという思いに駆られ、この研修に参加した。

写真１　千葉理事長と私の娘、合同研修先のデンマーク社会省にて

そして、２週間の合同研修のあと、自閉症施設の日中活動やグループホームの生活を体験し、その支援の様子を貴重なＤＶＤに収めて、さっそく事業所で役立てている。

Ⅱ．日本とデンマークにおける自閉症者に対する理解の違い

私は、２年前にデンマークを訪問した経験から、一般のデンマーク人の障害者へ対する理解の仕方は、わが国におけるそれと違い、より積極的な意味で、障害のあるなしを区別せず人権を認める一方、障害がある故に必要な対策を取ることには熱心であることを知っていた。ところが、その理解の仕方は長い時間をかけて徐々に成熟してきたものだということが、親娘１ヶ月間の滞在経験を通してよく分かった。

例えば、Ｒｏｓｅｎｇａａｒｄｃｅｎｔｅｒという大きなショッピングセンターを見学したとき、娘は人の多さに興奮気味で、２階から１階へ降りるエスカレーターの先にある大きな回転ドアに突進し、ガラスを蹴ってしまった。慌てて制止すると、今度はそのあたりにたまたまいた子供の頭をたたくという事件を起こし、制服を着たセキュリティーサービスがすぐにとんできて、子供を保護した。私は、周りの人に謝りながら、また、被害に遭った子供とそのご家族を眼の前にしながら、娘を抑えて、脇にあった椅子に娘を座らせて落ち着かせるのに必死で、被害者方と話ができるまで５分くらいかかった。

そのあと、そのご家族と話をしていた４０歳くらいの女性が「どうしたのか。」と私に説明を求めてきたので、「自閉症の娘が回転ドアを怖がってパニックになった。」と答えると、「今、私にした話をそのままこの子のご家族にしてください。」と言われた。

そこで、まったく同じ話をもう一度、その子の父親にしたところ、「自閉症なら仕方ない、そういうこともするでしょう。私は自閉症のことをよく知っていますよ。」と許してくれた。たたかれた高校生くらいのお嬢さんは泣きじゃくっていたが、そのご両親がよくなだめてくれた。

と、すぐに先ほどの女性に礼を言おうと探したが、もうどこにもその姿はなかった。初めての土地で何かトラブルがあったときに、間に誰か入ってくれると非常にありがたいものだ。

１か月の滞在期間中にこのようなことが３度あった。娘が他人をたたいたりすると、頼みもしないのに必ず中年の女性が間に入ってきて話をしてくれた。たたかないまでも、物を壊したり、人ゴミで走りだしたり、大声をあげたりしているのを観察するうちに一つの法則のようなものに気付いた。それは、７０歳くらいの老人には自閉症者への理解がないということや多くの高校生くらいの若者は奇異な目で娘を見て、差別的な発言をしていたということだ。デンマークでは、６５歳以上くらいの人はデンマーク語しか話せない人が多く、第２次世界大戦後の教育で英語が必須となり、ほとんどの人が英語を話せるようになったとのこと。

戦後の教育や最近の２０年間の自閉症者への国をあげての施策の展開から若い世代では自閉症への理解が進んでいる。しかし、高校生世代ではまだ、物珍しさや奇異なものへの無理解が理性的な考え方に勝ってしまう。ちょうど日本において私たち親娘が長年実感したと同じ状況がこの２つの世代に感じられた。

Ⅲ．デンマーク人が日本人の知的障害者を支援する際の問題

日欧文化交流学院に昨年１０月から、知的障害者コースが開設され、１１名の生徒が１年間の寝食を共にした教育を受けている。年齢も性別も違うが、かなり軽度の知的障害と思われ、知的障害者の大学といったところだ。そこに娘が当初計画では２週間、留学することになっていた。結果的には、さきほど述べたように、ここでも先生をたたいたり、ものを壊したりするので、職員会議で「これ以上、授業を維持することは不可能。」ということになり、１週間の滞在に変更されたのだが、短期間ではあっても、実際にデンマーク人のカリーナ（ｋａｒｉｎａ）先生と娘が授業を体験できたことは、有意義だった。

写真２　音楽鑑賞の授業は楽しかった

「ライフ」の時間には世界のゲームや遊び、音楽鑑賞、英語、などがあり、選択科目では体育、園芸、陶芸、ジャーナリズム、ジュエリー、料理、水泳、ヨガ、日本文化等の授業があり、デンマーク人のほか、日本人の先生もいる。娘には日本人の先生がつき、通訳と補助教官の役割を果たした。

ここでの問題は、やはり、言葉の通じない障害者の扱いに苦労したことだ。授業が難しくなると、不適応を起こし、そこに居られなくなったり、状況の説明や把握が難しかったりする。しかし、状況の把握、あっ

た事象の検証ということについては学院の先生方はよくミーティングを開き、熱心に次の日の段取りに活かそうとした。

写真３　朝、５時に起きておにぎりを持って８時のバスに乗る自炊生活

次に２週間研修した、オーデンセ（Ｏｄｅｎｓｅ）のトーンビア（Ｔｏｒｎｂｊｅｒｇｖｅｊ）の自閉症施設（ＴＯＲＮＨＵＳＥＴ）では、カーレン（Ｋａｒｅｎ）副校長が担当した。ここは、作業所というよりは日本の生活介護に近いところで、簡易作業として、絵、フェルト飾り、組み立てツール、箱作り、ナイフ研ぎ、本読み、パズル、ビーズ、歌、など。生産作業として、織物、絵（シルクペイント、油絵、水彩画）

写真４　Ｋａｒｅｎ副校長にのこぎりの挽き方を教えてもらう。日本と反対で押す時に切る。

まき割り（ペチカ用薪切り）、ビーズ製品づくり、ソープ、クリスマス飾り、など。体調管理として、散歩、自転車、ガーデニング、ローラースケート、ダイエットのためのウォークマシーン、自転車こぎマシーン、筋トレ、ボール（インドア）遊びなどなどいろいろなアクティビティーを用意していた。そして、利用者それぞれの集中力に応じた時間で、１５分から１時間くらいに、これらのアクティビティーを組み合わせて、ＴＥＡＣＣＨプログラムをいれた１日の計画を立て、５人のペタゴーが

代わる代わる１２人の自閉症者を担当していた。

写真５　ボードメーカーはコミュニケーションシート作成支援ソフト

デンマークの基準では、スタッフの配置は、利用者１人に対し居住区（グループホーム）では、１．４人でワークショップでは０．４４人となっていた。また、たまにレクレーションでバスや列車を使ってチボリ公園に遊びに行き、毎週金曜日にはショッピングやカフェ、レストランに行くそうだ。もちろん、ＴＥＡＣＣＨプログラムで構造化（ＳＴＲＵＣＴＵＲＥ）されたなかで、

お出かけの際もテープに絵を貼り付けるようになった「ＳＴＯＲＹ」を持ち歩く。

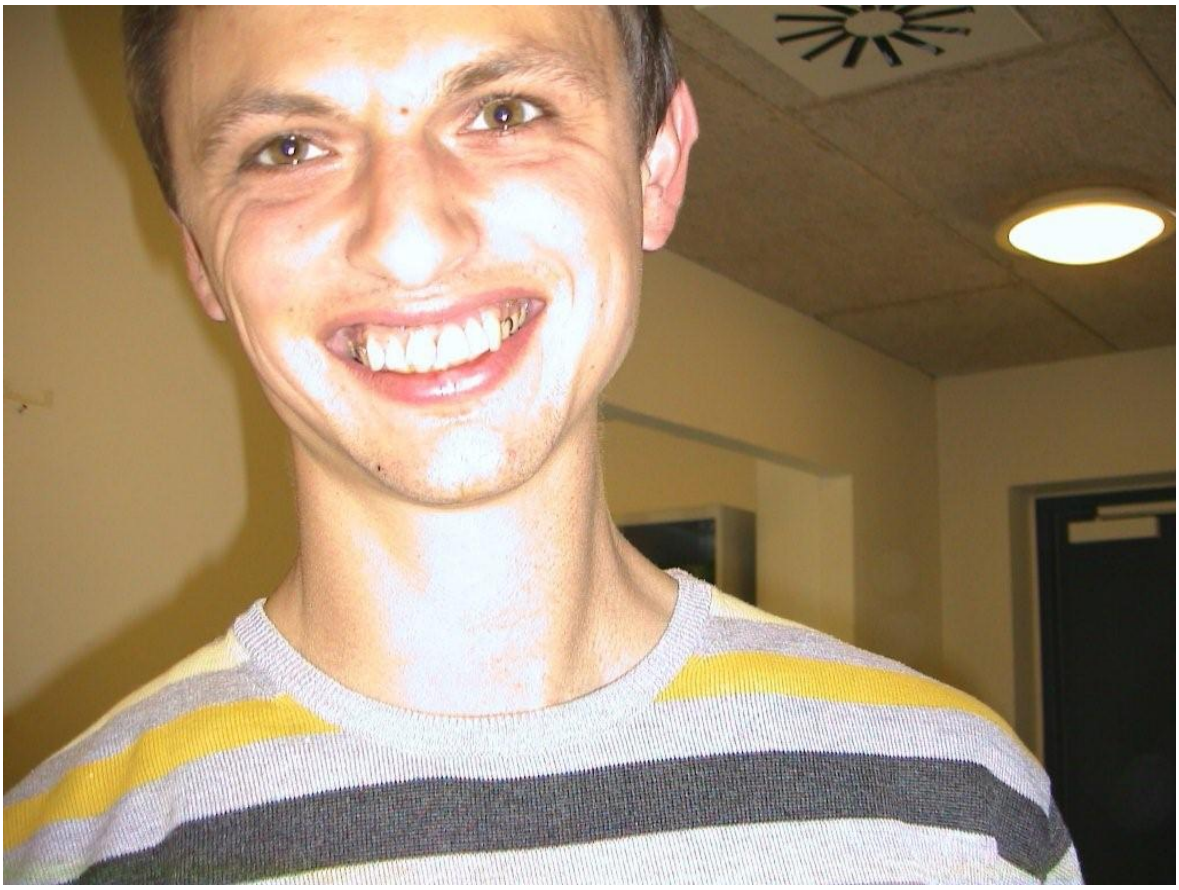

写真６　重度の自閉症者デニスに言葉はないが、気の合う友達

福祉施設だけあって、学院よりは落ち着いて娘も活動できたが、それでも時折不適応を起こし、先生をたたいたりして困らせた。その原因は些細なことなのだが、やはり言葉の通じない人にはなかなか分からない。

また、生活の場であるグループホームではなおさらだ。たとえば、夕食を共にした際、日本人だからとわざわざご飯を炊いてくれたが、イン

ディカ米の細長いやつにしょうゆをかけてフォークで食べていた。せっかくなので私も食べたが、娘もそんなに食べるわけがない。しかし、それでもデンマーク料理よりはましだった。重度自閉症者を支援する際、言葉と生活習慣の理解は大切だ。

Ⅳ．日本人がデンマーク人の知的障害者を支援する際の問題

１５年間、デンマークに滞在して、ボーゲンセフォルケスコーレ（ＢｏｇｅｎｓｅＦｏｒｋｅｓｋｏｌｅｎ・・ボーゲンセ国民学校）の補助教員や重度障害施設（グループホーム）の補助職員を経て、現在は学校傘下の学童施設で先生をしていらっしゃる加藤幸夫さんの経験からも、外国人がデンマークの障害者支援施設で働く場合、デンマーク語を１年間語学学校で勉強し、その後１年間の外国人のための特別基礎教養期間があり、さらに３年半のペタゴーセミナー（生活社会指導教諭の養成学校）を卒業し、先生の資格を得たうえで、多くのデンマーク人の中に混じって採用試験を受けるのだという。

採用されたあとの問題としては、日本人と違い、時間から時間の意識が強く、業務の引き継ぎの際の問題などがあるとのこと。

やはり、語学のハンディーや文化の違いなども軽視できない。

私が経験した自閉症施設での業務でも、働きぶりを見ていると、日本

人のほうが丁寧だという感があった。例えば、日本人なら製品の敷物の上をスリッパで踏んで行ったりはしない。ただし、業務の計画性や報告連絡といった部分では実に細かく行われていた。例えば、毎日の活動中には頻繁に職員同士で対象となる利用者の支援にかかわる事項の確認や連絡をとっているし、１人の利用者につき１週間単位で支援計画を立てている。さらに３か月に１度は精神科の医師を含めて１０人ほどのスタッフが支援の在り方について数時間のミーティングをしているという。

私事になるが、今回の研修のもう一つの目的は、娘の薬の量を減らすことだった。精神科の医師から８種類の薬を処方してもらっていたが、「本当にこんなに多くの薬を飲む必要があるのだろうか、飲まないほうがかえって落ち着くのではないか」と自問自答していた。デンマークのようなゆったりした環境のなかで過ごせば、薬は減らせるのではないかと考えたのだ。もちろん、「できれば薬は少ないほうが良い」という医師や薬剤師の了解を得たうえで、できるだけ減らそうと１ヶ月間、努力してみた。

結果的には、リスパダールという薬の量が少し減らせただけだったのだが、施薬よりも、ケアする人間のやり方次第で良くもなり悪くもなるということが改めてよく分かった。あくまでも、薬は補助的な役割しか果たさない。しかも、日本では、症状を訴えることにより、どんどん量と種類が増えるのだ。デンマークの精神科医は基本的に１種類だけの薬

で処方するのが普通だそうだ。研修先のＴＯＲＮＨＵＳＥＴでも住人の１人にリスパダールを与えていたが、私が聞いたり見たりした範囲では症状に対して最小限にとどめているのがよく分かった。

つまり、デンマークでは、自閉症が原因で起こる反社会的な行動を抑えるには、薬で情緒を鎮めるのではなく、福祉的なケアを使って鎮めている。日本でも家庭や地域社会に福祉的なケアの力をつけなければならない。

また、日欧文化交流学院の千葉忠夫さんによると、地域においても障害者のケースが生じた場合、地域精神医療班が地域で説明会を行い、認知症や自閉症など「正しい接し方を知らない場合、より困難な状況に陥る可能性がある。」ことを知らせ、たとえば、「悪いことを行った時に怒鳴ったりしないことによって２次障害を防ぐことができる。」と教えている。ここで重要なのは、医師や看護師がこれを行うことによって、一般の住民が障害者への接し方を学ぶと同時に、当然、接し方を知っているはずの親が、なかなか現実には正しい接し方ができない懸念があるが、より多くの周囲の人々との意識の共有感があれば、必要以上にわが子を叱ることをやめて、療育に専念できるということだ。自宅においても余裕が生まれ、２次障害がどんどんひどくなる悪循環を断ち切ることができる。

このように、いろいろなレベルで民主的なミーティングが持たれてい

る。一般的な話だが、日本人は職人気質に優れ、自閉症などの障害福祉分野でも１人１人の生活支援員のレベルは高いという。苦手なことは、民主的な手法により組織全体で協力して１つの目標を達成していくことだ。障害福祉についても、国レベルでいえば中央集権的なやり方を改め、地方分権を進めること、法人レベルでいえば、職場のおけるトップダウンをあらため、民主的なやり方を進めるといったことだろうか。

Ｖ．知的障害福祉分野への外国人労働者受け入れの可能性について

２００７年現在、日本において障害福祉分野への外国人労働者の受け入れは解放されていないが、近い将来その必要に迫られると予測される。特に、地方においては、地元に残る若者が少ない一方、障害を持つ人は地元を離れられないというケースが多く、加えて、今までは「成人した重度知的障害者は入所施設に入れておく」という考え方が一般的だったが、親の考え方や、法律の改正で「地域で暮らす」という考え方が主流になってきているので、重度知的障害者を支える労働者が非常に不足すると考えられる。

そこで、今回の研修で感じたことをまとめると、知的障害者福祉分野の現場へ外国人労働者を受け入れるにあたって重要なこととして、以下の点が上げられる。

① 日本語については、利用者とのコミュニケーションやその生活環

境の理解のためと職員間の円滑な業務遂行のために、日常会話程度は必須になる。

② 知的障害に対する専門知識の習得あるいは資格についてのチェックをどうするかであるが、あくまでも日本の教育、資格を前提に行うべきと考える。

③ 日本における生活経験を重視すべきである。1年間の語学研修や日本の大学や専門学校における資格や単位の修得にかかる期間を考えると、少なくとも3年から5年程度の日本での生活を必要と考えるが、生活支援員として働く以上、それくらいの経験は必要だろう。

④ 生活支援員になるためのステップを作る必要性がある。あまり高いハードルを置くと、いくら日本で知的障害者の支援をしたいと思う外国人労働者がいたとしても、資格を得るために払うコストが高すぎて、最初からあきらめてしまうに違いない。日本へ行くよりも他の国を選ぶだろう。そこで、日欧文化交流学院のような外国人を受け入れる全寮制の研修センターを各地に作り、語学研修のあと、福祉現場へ研修生の形で半年とか1年とかの契約職員やパート職員経験を積み重ね、補助的な仕事から始めて3年から5年程度の実績を得たうえで正職員として採用されるなどのコースを作ってはどうだろうか。

Ⅵ．おわりに

私の娘は、帰国して１ヶ月間は、魔法にでもかかったように家でもコリアンダーの家でも、おとなしく「いい子」だった。ところが、梅雨の鬱陶しさからか７月に入ったころからは、頭頂部の髪の毛を１本ずつむしり、河童のようなハゲを作るようになり、以前にもまして、皿を割ったり、電気製品を壊したりするようになった。真夏になると、着ている服やタオルをパンツに至るまで片端から破り、わざと失禁を繰り返し、一歩も外へ出られなくなった。

福祉的なケアの問題と医療的な施薬の問題と両方から原因究明を図っているが、デンマークでできたようなケアができないことが一番の原因だと私は思っている。この厳しい悲惨な現実を打開するために手をこまねいているわけにはいかない、経営のスリム化を強いられる今、日本中のいたるところで我々のような現実に直面する親や事業所が多くなるだろう。デンマークにおけるペタゴーの年間収入は、私が研修に行った施設では、国家公務員である５年以上の経験者で２９０．０００クローネ（６．６７０．０００円）１５年以上の経験者では３５０．０００クローネ（８．０５０．０００円）といったところで、デンマークにおける平均的な収入を得る職業だそうだ。これに比べ、現在の日本の障害福祉現場の生活支援員の年収は、その４割程度といったところだ。意欲のある若者も３０歳を過ぎて所帯を持つ年齢に達すると他の職業に就かざるを得ないのが現状だ。外国人労働者なら、５年か１０年日本で働

いて母国へ帰り、貯めたお金で所帯を持って事業を立ち上げてもよかろうが、日本人の若い労働者ではそうはいかない。このような状況でも、もっとも重要なことは、やはり福祉的ケアの技術を磨くことだ。そして、日本人の若者には日常英会話くらいはできて、外国人でも使えるリーダー的労働者になって高収入を得てほしい。人口１８万人のデンマークの地方都市であるオーデンセ（Ｏｄｅｎｓｅ）で毎年行われるペタゴーの学会に、2年に一度は世界中から参加者が招かれ大会を開催するという。視野を広くして、積極的に問題に取り組むために、あえて外国人労働者への市場開放を国に進めてほしいと思う。熱心な外国人の若者が日本人の若者や日本の福祉現場にいい刺激を与え、自閉症などの障害に苦しむ人たちをともに支援してくれることを親として、また、経営者のはしくれとして望むところだ。

写真７　TORNHUSETのJes Anderesen校長と私

最後に、この研修に親娘で参加させていただき、貴重な経験をさせていただいたことを清水基金の皆様、日欧文化交流学院の皆様、一緒に参加した研修生各位、職場の皆様に心より感謝申し上げます。

海外研修収支決算報告書　　（１クローネ＝２３円）

収入の部	
収　入　項　目	金　額　（円）
助成金（清水基金）	700,000
個人負担	100,590
計	800,590
支出の部	
支　出　項　目	金　額　（円）
交　通　費	253,218
航空運賃等（本人分）	201,460
鉄道・バス等(本人分)	51,758
滞　在　費	312,528
宿泊費（本人分）	191,040
消耗品費	41,055
飲食費	80,433
研　修　費	152,231
合同研修費(本人分)	150,000
個人研修費（本人分）	2,231
諸雑費	82,613
土産代	52,233
教養娯楽費	7,360
通信運搬費	18,512
資料代	1,840
その他雑費	2,668
計	800,590

別途、娘の渡航滞在費用３８８，９８９円

研修日程と主な訪問先

日程	訪問（研修）機関	機関の概要と主な訪問先
４／１５ ～ ４／２８	合同研修 合同研修終了	日欧文化交流学院に滞在 Bogense Kystに滞在し自炊
４／３０	ＴＯＲＮＨＵＳＥＴ Tornbjergvej1, 5220OdenseＳØ Tlf.6315 2580	自閉症者入居及び作業施設 まき割り（ペチカ用薪切り） 織物、組み立てツール 昼食
５／２	ＴＯＲＮＨＵＳＥＴ 作業施設	昼食 パズル、組み立てツール ブランコ 外での遊び お茶
５／３	ＴＯＲＮＨＵＳＥＴ 作業施設	グループホームの見学
５／７	ＴＯＲＮＨＵＳＥＴ 入居施設	グループホームの見学 夕食
５／８	ＴＯＲＮＨＵＳＥＴ 入居施設	昼食 組み立てツール 自転車こぎマシーン 居住区ペタゴーPeter Mark さんと質疑応答
５／９	ＴＯＲＮＨＵＳＥＴ 作業施設 入居施設	まき割り（ペチカ用薪切り） お茶、ビーズ 昼食 デンマークで働く加藤幸夫さんにインタビュー
５／１０	ＴＯＲＮＨＵＳＥＴ 作業施設 日欧文化交流学院	Jes Anderesen 校長に財務関係の話をうかがう
５／１１	ＴＯＲＮＨＵＳＥＴ 作業施設	